

ガンバレ鎌倉シンポジウム・パネルディスカッション 『世界の中の鎌倉～登録を実現するために～』



左からパネリストの三浦勝男さん、工藤父母道さん、稲葉信子さん
右端はコーディネーターの伊藤一美さん

◎ パネルディスカッションの発言要旨は次の通り。

(伊藤) なぜ鎌倉にたくさんの人が集まるのか。鎌倉はどんなイメージが持たれているのだろうか。

(三浦) 脚はこの地、眼は世界に。鎌倉は世界に一つしかない。武家政権の文化とか遺跡がわずか1メートルの地下に残っている。大いに威張っている。日本の宝であり、世界の宝にもなる。

(伊藤) 世界の宝をどのように考えるべきなのか。

(工藤) 和歌山県で高速道路延長のための測量で、世界遺産・熊野古道沿いの立木が何本も伐られた。原爆ドームのバッファゾーン内で、マンション建設による景観破壊も問題になっている。世界遺産登録は、それを守っていくということの世界への意思表示でもあるが、さまざまな問題が起こっている。課題の多い世界遺産条約ではあるが、この条約を進化させていかねばならない。鎌倉の世界遺産登録の推進は、一方で大変な責任を将来の子供たちに背負わすことになる。私たちの思いだけでなく、世界遺産の意義と重要性について、次の世代へのしっかりとした啓発こそが最も重要だ。

(伊藤) 世界から鎌倉を見たらどのように見えるか。外国人が鎌倉にたくさんやってくる理由は何か。

(三浦) かつては、仏像を買いたいのだがどれぐらいあるのかと聞かれたことがあった。大きく変わってきているのは、外国人はよく調べて鎌倉に来ているということだ。鎌倉の柱となるような歴史・文化が一見してわかるような体制になってほしいと思う。

(工藤) 「古都鎌倉の寺院・神社ほか」から「城塞都市」、「武家の古都」へと世界遺産をめざす考え方は変わってきたが、これは一つの成果ともいえる。漠然とした鎌倉の文化遺産としての骨格を示すからだ。しか

し果たしてそれで十分なのか、もうひとひねりだと思う。その上で、世界遺産としての顕著で普遍的な価値、完全性や真正性が問われるのだから、確固たる価値証明の構築が必要となる。それは鎌倉の誇りである文化遺産としての価値をより高めることにつながる。

(稲葉) 鎌倉にある文化財の価値をもう一度見直して、そのそれぞれに、そしてその繋がりにどのような顕著な普遍的価値があるかを考え直さなくてはならない。地元の文化財としての価値、国の文化財としての価値をそのまま並べるだけでは顕著な普遍的価値とはならないが、しかしそこが出発点であることも確かである。

(三浦) 若宮大路などを外国人に案内したことがある。「印象に残るものはない。分からない」と言っていた。顕著な普遍的価値とは日本的価値が世界的価値につながることである。とにかく継続が大事だ。グローバル化というのが欧米化することではない。大勢の理解を得ることは大事だが、鎌倉らしさとか日本の心を捨ててはいけぬ。脚は鎌倉の大地に、眼は世界に向けよとして鎌倉女学院などでも熱心に取り組んでいる。子どもたちを含めた人の輪を、少しでも大きくしていくことだ。

(稲葉) 私はもともと建築が専門なので、町並みとか景観保全にかかわってきた。そこで規制を押し付けられると、嫌になってしまうという住民の傾向を見てきた。人々はそれぞれのこだわりで生きているのだ。地元ではどのように考えて自らの価値を高めようとしているのか。全体を統一する鎌倉のイメージとは何なのかを考えたい。外国人を招待したり、小学生が鎌倉を回る時にどのように回るか。そのモデルが必要だ。

(伊藤) モデルについては「かまくら子ども風土記」というベストセラーがある。50年ほど前に作成され、児童用ではあるが、一般来鎌者にも重宝されている。

(工藤) 一つ気になることがある。国際基準で評価されなくてもよいが、世界遺産にはなってほしいという。まったく矛盾している。鎌倉は世界遺産にならなくても十分価値はある。にもかかわらず皆さんが登録したいと願うのは何故なのか。鎌倉の文化遺産としての国際基準での客観的な評価を知るうえでも、世界遺産登録の推進活動の意義はある。そうした中で、私たちがこれまで気付かなかった視点で、より多くのことを改めて学ぶ機会となるからだ。

(伊藤) プロセスが大事ということだと思う。結果として登録されたら、子供たちの世代に責任とともにつながっていくということ、再確認していただきたい。